

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 201 回 圧倒的差別化能力 = セレンディピティ (serendipity)

2007.5.13

英の作家ホレス・ウォルポール(1717~97)が書いた「セレンディップの三人の王子」という童話がある。セレンディップとは、かつてのセイロン、今のスリランカのことである。王子達は旅の途中、いつも意外な出来事と遭遇し、彼らの聡明さによって、彼らが元々探していなかった何かを発見する。たとえば...

三王子が旅をしていると、キャラバン隊の隊長に出会う。隊長は逃げ出したラクダを探しているという。王子達はそのラクダを直接見ていないにも拘らず、「歯が1本抜けていませんか?」「足が1足不自由ではなかったですか?」等と特徴を言い当てる。

なぜ王子達は、ラクダの特徴を言い当てることが出来たのか?それは王子達が歩いてきた道には、ラクダが葉っぱを食べた跡があった。その食べ跡を見ることで、歯が1本抜けていることが分かった。また、王子達が歩いてきた道にはラクダの足跡があった。その足跡は、1つの足を引きずりながら歩いたような跡であった。それで足が不自由なことが分かったのである。セレンディップの王子達は、普通の人気が付かないようなことに気付いている。そしてその気が付きが、思いもよらぬ幸運をもたらしていく。(福島正人著「幸運をつかむヒント」~ 中小企業診断協会発行 企業診断ニュース 2007.5月号、参照)

色々なフィールドで活躍している人を見ると、等しく「チャンスを活かす能力が高い」ことが分かる。他の人が気が付かないようなところでチャンスを見つけ、それを積極的につかんでいる。この能力を経営的に「セレンディピティ」(serendipity)と呼んでいる。

求めずして思わぬ発見をする能力、思いがけないものの発見を意味する言葉で、「偶察力」と訳される場合もある。何かを発見したという「現象」ではなく、何かを発見する「能力」のことを言っている。最近、経営用語的に使われることが多くなったが、むしろ、自然科学の世界では随分前から使われている。

たとえば、Aフレミングのペニシリンの発見、WレントゲンのX線の発見、Aノーベルによるダイナマイトの発明、江崎玲於奈のトンネルダイオードの発見、近くは田中耕一の高分子質量分析法(MALDI法)の発見等々、全てセレンディピリティである。

セレンディピリティは、2つの要素をクリアすることである。1つは偶然の中にチャンスを見つけ出す要素、もう1つは、そのチャンスを活かす能力であろう。

第1の要素は、旺盛な好奇心、常に怯まぬ問題意識、高々と掲げた高感度アンテナ、この3つが揃えば、チャンスは何処にでもある。第2のチャンスを活かす能力、これは偶然を必然に変える能力である。これは出会いと交流を大切にすること、情報収集・情報発信を絶やさないと、それに利他性を高めること、この3点に尽きる。セレンディピリティの発揮いかんにより、会社の将来が変わってくる...**圧倒的差別化能力**といえるだろう。